

間におけるシンチフォトを比較すると、静注後2時間以降が読影に最適と思われた。

^{203}Hg -クロルメロドリンによるシンチグラムとの比較では、両者にほとんど差を認めなかった。

space taking lesion の存在が疑われた症例に5~10 mCi の Tc-DMS をボーラス静注し、RI アンギオを施行した。renal cyst には欠損像が、Gravitz 腫瘍には取り込みが認められた。

難点として、腎皮質の Space taking lesion の検出には優れているが、腎孟、腎髓質の病変の診断にはやや劣ることが考えられた。

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DMS による腎シンチグラフィーは腎被曝量は ^{203}Hg -クロルトロドリンに比べてはるかに少なく、腎の良好は static image が得られると同時に、RI ボーラス注入により RI アンギオが可能であり、何ら副作用も認めず、きわめて容易かつ安全に使用できる腎シンチグラフィー製剤であると思われた。

31. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DMSA による小児シンチグラフィー

宮坂 知治 高木八重子
(国立小児病院・放)

腎に用いられていた Hg-203 乃至 197 について、203 は USAEC の使用中止の勧告もあり、197 はエネルギーが低い等の理由から、小児、特に乳幼児にあっては、特殊なケースを除き、使用しない考えであった。

しかし、最近、腎尿路疾患の診断にあたっても腎シンチの有効なことが判って、その要望も多くなってきた。

1974年、Lin, 1975 年久田等の報告したように、Hg-203, 197 に比し種々の点で優れている $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DMSA が見出されたことは、誠に嬉ばしいことである。猶、小児などは若干の問題を含んではいるが、腎、尿路系疾患の早期診断にあたって、必要欠くべからざる診断法の 1 つと考えています。

第 1 ラジオアイソトープによる提供による DMSA を用いた症例の内、特殊なケースも含め報告する。

小児の場合、特に乳幼児では I.P. で腎の無発生、形成不全を疑わせる偏側の如くみえる症例が屢々ある訳で、これが確定診断を下すことが出来る。

次に、従来、直ちに血管撮影等が行われがちの腫瘍の診断がある。等感度シンチのカラーシンチと共に駆動した素子を用いての取り込み量をしらべることにより、診断率を向上し、早期診断が可能と考える。

Phelonephritis+尿路狭窄+左腎機能不全の症例のシンチ、又、尿管瘤 ureterocele も判つきり描写される。現在入院中で近く分離手術が予定されており、うち坐骨部結合による双生児の腎シンチにより、I.P. ではあまり判然としない反対児への腎が描写され血流の交流が確実である症例等について報告する。

32. 多発性囊胞腎 15 例の $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DMSA による腎イメージの検討

大石 幸彦 千葉 一夫 山田 英夫
松井 謙吾 村田 啓 川口新一郎
飯尾 正宏
(養育院病院・核医学放)
三木 誠 上田 正山 木戸 晃
柳沢 宗利 町田 豊平
(慈恵医大・泌尿器)

多発性囊胞腎の診断には IVP, RP, 腎動脈撮影、Scintigram が行なわれてきた。しかし、IVP は腎機能障害の進行に伴い腎描出は困難となる、RP は感染の危険が大、腎動脈撮影は患者の負担が大、 ^{203}Hg -Neohydrin Scintigram は腎被曝が大きくまた、腎機能障害時の腎描出限界がある、といった欠点がある。今回我々は本症の診断に $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DMSA による腎イメージを行ない検討した結果および、本症と囊胞肝の合併について肝シンチグラムの面より検討した結果について報告する。

対象：慈恵医大泌尿器科と東京都養育院付属病院核医学放射線部における 15 症例（女子 11 例、男子 4 例）、年齢は 31 歳～65 歳（平均 44.3 歳）であ